OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	蓮体所持本『沙石集』について : 前稿の補足を兼ねて
Author(s)	山崎, 淳
Citation	詞林. 2008, 43, p. 89-98
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67582
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

蓮体所持本『沙石集』について

――前稿の補足を兼ねて――

山崎　淳

一　はじめに

稿者は、前稿「『観音冥応集』出典考―巻第三8話を例として―」（『詞林』41　平成19・4）において、蓮体（1663～1726）編の観音霊験説話集である『観音冥応集』（以下『冥応集』）の一話を取り上げ、①『沙石集』が出典であること、②本文は略本系の『沙石集』に近いこと、③先行する類話よりも観音霊験譚としての面が強調されていること、④独自要素である美文調の部分は『太平記』が出典であること、などを指摘した。このうち②に関しては、おそらく刊本の『沙石集』を用いているとの推測を提示しておいたが、最終的に何年刊のものかを指摘するには至らなかった。

その後、蓮体入寂の地である地蔵寺（現河内長野市）の蔵書を拝見する機会を得、蓮体の所持していた典籍について調査することができた。地蔵寺御住職堀智真師のお話によれば、同寺蔵書は現在約四〇箱に収められている。また同寺内の目録カードによると、浄厳（蓮体の師）・蓮体の著作と刊本類が大半を占める。注目すべきは、『元亨釈書』寛永元年（1624）刊整版本、『撰集抄』慶安四年（1651）刊整版本、『発心集』慶安四年刊整版本、『長谷寺霊験記』承応二年（1653）刊整版本、『宝物集』元禄六年（1693）刊整版本（第一種七巻本）などの説話集類が散見することである。『沙石集』もその中に含まれている。

そこで本稿では、地蔵寺蔵『沙石集』について報告するとともに、蓮体が『冥応集』編纂にあたって使用した『沙石集』に関して、改めて考察を加えることにする。

二　地蔵寺蔵『沙石集』について

地蔵寺蔵『沙石集』（以下地蔵寺本）は、刊本（片仮名本）で、巻第一・二・四・五の四冊が残っている（通常は巻第十が最終巻）。四冊すべてに表紙署名があり、いずれも表紙右下に朱で「惟宝」と記されている（写真1参照）。「惟宝」は蓮体の諱である。したがって、地蔵寺本が蓮体所持本であったことが確認できる。[1]

（写真１）巻第二表紙

地蔵寺本の現存部分には刊記がなく、何年の刊本なのかは不明である。しかし、地蔵寺本各巻の巻頭目録には、他の版とは異なる特徴がある。それは、説話題目の上にある説話番号が丸で囲まれていること、各説話題目の下にはその説話が始まる丁が記されていることである（写真2参照）。以下、現時点で確認した『沙石集』諸本を列挙する。

・広本系（十二帖本）…俊海本・米沢本・元応本・藤井本（以上写本）
・広本系（十帖本）……梵舜本・内閣文庫本・阿岸本（以上写本）
・略本系……長享本・神宮文庫本・岩瀬文庫本・中央大学本（以上写本）・慶長十年（1605）刊古活字十二行本・同年刊古活字十行本・元和二年（1616）刊古活字本・正保四年（1647）刊整版本・慶安五年（1651）刊整版本・天和三年（1683）刊整版本・貞享三年（1686）刊整版本（以上刊本）[2]

例えば、正保四年刊本の巻頭目録には、説話番号も丁の情報もない。最も流布したとされる貞享三年刊本の巻頭目録では、説話番号が四角で囲まれており、丁の情報はない。

では、地蔵寺本の刊年は確定できるのだろうか。実は地蔵寺本と同体裁のものが存在する。それは右に挙げなかった貞享二年刊整版本である。当該本は、稲垣泰一氏「〈資料紹介〉架蔵貞享二年版『沙石集』について」（『説話』10　平成12・2）で初めて本格的に紹介された刊本である。稲垣氏蔵本も含め、所在の知られている伝本の簡単な情報を挙げておく。

・稲垣泰一氏蔵本
　…十巻十冊、巻第六・巻第七に欠丁あり。未見。
・京都府宮津市立前尾記念文庫蔵本
　…十巻八冊、完本（巻第七・八、巻第九・十が合冊）。
・長母寺蔵本（安藤直太朗氏旧蔵）…未見。[3]

以上三本のうち、稿者は二番目の前尾記念文庫本を調査す

（写真2）地蔵寺本・巻第一巻頭目録

（写真3）前尾記念文庫本・巻第一巻頭目録

ることができた。同文庫本の巻第十末尾には、「貞享二年〈乙丑〉歳仲冬日（右に「摂陽」、左に「書林」）　開板（右に「銭屋治兵衛」、左に「和泉屋五兵衛」）という刊記がある。[4]

写真2と3は、地蔵寺本の巻第一巻頭目録と前尾記念文庫本の巻第一巻頭目録である。

地蔵寺本と前尾記念本は、明らかに同じ特徴を備えている（前掲稲垣氏論考に掲載されている写真も、右の二本と同じ）。このほか、柱（「沙之一」など）や丁数も一致するし、寸法もおおむね同じである。地蔵寺本は貞享二年刊本とほぼ認定してよいだろう。

稲垣氏論考によれば、翌年に出版された貞享三年刊本が数種類存在しているのに対し、貞享二年刊本にはそういった形跡がなく、したがって貞享二年刊本はあまり流布したものではないとのことである。とすれば地蔵寺本は、残欠本とはいえ、貞享二年刊本の一本として貴重な存在といえる。

また、たとえ広く流布しなかった版であるにせよ、時期的に蓮体が手に入れておかしくない『沙石集』であったことも指摘しておきたい。

三　蓮体による書き入れ

貞享二年刊本であることに加え、地蔵寺本にはさらに注目すべき点がある。それは蓮体による書き入れの存在である。

地蔵寺本には、数多くの書き入れが見える。最も多いのは、もともと付けられている句切点に朱で重ね書きしたものと、地名・人名・官名・書名・年号に付された朱引であるが、それ以外にも、本文中、欄外に様々な書き入れがある。

例えば、巻第二10話「仏法之結縁不レ空事」[3]では、高野山の南証房の前世が、蛤・牛・馬・柴燈タク者・奥院ノ承仕の順で記されている。それらの傍らには、前世の順序を示す「一」～「六」の漢数字が朱で記されているのである。これら書き入れの字は、蓮体の自筆本の字と同じであり、本人によるものと考えてよい[4]。

書き入れには、本文を校訂したものが認められる。中には、あからさまな誤刻の訂正もある。巻第四1話「無言上人事」の「信ズシバ益大ニ」の「シ」に、朱で「レ」を重ね書きした例などは、その類である。しかし、一方で単純な訂正にとどまらない例も存在する。それらの書き入れからは、蓮体の見た『沙石集』が、貞享二年刊本だけではなかった可能性が浮上してくる。以下その点について、個々の事例を取り上げて考察してみる。

地蔵寺本には、二箇所の異本注記がある。いずれも朱書きである。一つは、巻第一7話「神明道心貴給事」における、「止観云、…八相成道以論二其終一」の「以論其」に付された「利物イ」である。今一つは、巻第二5話「地蔵之看病給事」における、「建仁寺ノ本願僧正ノ口伝ニ、地蔵ノ決トテ、一巻ノ秘書アリ」の「蔵」に付された「不イ」である。

まず、一例目を検討してみよう。「八相成道以論二其終一」が、『摩訶止観』第六下に基づく有名な句であることは言うまでもない。また、『義経記』巻第六「静若宮八幡宮へ参詣の事」に「八相成道は利物の終」とあるなど、日本では「利物」を使う形も多く存在する[5]。しかしながら、前節で挙げた諸本の範囲ではあるが、『沙石集』で当該句を有する伝本（内閣文庫本と略本系諸本）に、「利物」の異文を持つものは確認できない。もちろん、そのような本文を持つ『沙石集』の存在は否定できないし、今後、新伝本が発見されることもあるだろう。ただ「利物イ」は、『沙石集』の異文というよりも、むしろ「八相」云々の句自体の異文として注記されている可能性も視野に入れておくべきかもしれない。

二例目はどうだろうか。本文は諸本で出入りがあるが、当該部分を有する場合、「地蔵ノ決」（岩瀬文庫本・正保四年刊本・慶安五年刊本・天和三年刊本・貞享三年刊本）とする伝本と、「地不ノ決」（梵舜本・内閣文庫本・長享本・神宮文庫本・慶長十年刊古活字十二行本・同年刊古活字十行本・元和二年刊古活字本）とする伝本に分かれる。『雑談集』巻第六「地蔵事」には、

「故建仁寺ノ本願ノ口決ニ、地不決ト云書有レ之」（傍線は私。以下同じ）とあり、『沙石集』でも前掲引用部分に続けて「其中ノ肝心ニ云、地蔵ハ大日ノ柔軟ノ方便ノ至極、不動ハ剛強方便ノ至極」とあることから、「地不ノ決」が本来的な形であったと考えられる[8]。蓮体もそうした点は把握していたと想定する必要はあるが[9]、この例の場合、他本を以て注記した可能性は十分にある。

以下に挙げる三つの例は、異本注記ではないが、蓮体が他の伝本を見ていたかどうかを考える上では看過できないものである。

巻第二10話「仏法之結縁不レ空事」では、「高野ニ南証房ノ検校寛海（クヮンカイ）トイフ人ハ」の「寛」の左に朱で「覚」という注記がある。この場合も、「寛海」（岩瀬文庫本・正保四年刊本・慶安五年刊本・天和三年刊本・貞享三年刊本）とする伝本と、「覚海」（上記以外の諸本）とする伝本に分かれる[10]。「覚」の注記を施すにあたり、蓮体が他本を参考にしたとしてもおかしくはない。ただし、「高野山の南証房」であれば、「覚海」が正しい[11]。他本を見なくとも、真言僧である蓮体の頭には、「覚海」が想起されていたと考えることもできるだろう。

巻第五8話「学匠之蟻蝪（アリタヽ）之問答事」では、「ヤガテ蟻蝪（アリタヽ）ニ問テ曰」の「蝪」を朱で抹消し、「蟻」の前に朱で「蝪」を補入している。つまり、蝪が蟻に問いかける形に訂正しているのである。蟻が蝪に問いかける訂正前の形は、刊本類に多い（写本では内閣文庫本と岩瀬文庫本）。一方、写本類の多くは、訂正後と同じ蝪が蟻に問いかける形である。この例を、他本を参照した訂正と見ることは可能だろう。もっとも、前掲の引用に続く問が「何故シテ蟻ヲ名レ蟻ト（ルト）耶」であること、後に記される蟻から蝪への問いかけが「何故蝪名レ蝪ト（ヲルト）耶」であることから、蓮体はそれらと整合させようとしたとも理解できる。すなわち、内容を勘案した上での訂正だったとも解し得るのである。

最後の例は、巻第五22話「連歌事」の末尾にある「万葉ガヽリノ歌ノ事」である[12]。この説話には「藤追」という人名が二箇所に見える。その二箇所ともに、地蔵寺本では朱で「シン」の振り仮名が記されている。「追」は紛れようもない楷書体であり、「シン」と読むには無理がある。さりとて読み間違いとも考えがたい。諸本も一様に「藤追」である[13]。ところが、阿岸本（写本）の当該部分には、「進」とも読み得る字が記されている[14]。地蔵寺本の「シン」の振り仮名は、このような「進」に似た字（あるいは「進」そのもの）が記された伝本を間に置くことで理解できるのではないだろうか（もちろん『沙石集』以外に、当該説話を載せる文献が存在した可能性も想定はしておかねばならない）。

地蔵寺本の書き入れについて考察を加えてみたが、異本注記があったとしても、または他の伝本の本文と一致する注記があったとしても、蓮体が他本を見たという決定的な証拠に

はならないようである。当然、どの伝本を参照したかを比定することも困難である。前掲の諸注記は、写本類と重なる傾向があり、二例目や最後の例のように、他本を見た可能性を強く示唆するものもあるが、地蔵寺本が残欠本である以上、事例が十分とは言い難い。したがって、現時点で判断を下すことには慎重でありたい。

四　書き入れと『観音冥応集』

本節では、ある特定の説話への書き入れを取り上げることにしたい。その説話とは、前稿で考察の対象とした『沙石集』巻第一9話「依二和光之方便一止二妄念一事」である。本説話が、蓮体編『観音冥応集』巻第三8話「和光ノ方便ニ依テ愛執ヲ離ル、事」の出典であることは、前稿で指摘した通りである。おおまかな筋は、「熊野の僧侶が、武蔵高滝の長者の娘に恋し、高滝へ帰った娘を追いかけていく途中に船着き場で夢を見る。その夢で、僧は娘と結ばれ、一男をもうける。船で鎌倉へ向かう際に、息子が海へ落ちてしまうというところで夢が覚める。世の栄華のつまらなさを悟った僧は熊野に戻り修行に打ち込む」というものである。

地蔵寺本の当該説話には、欄外に二箇所の書き入れ（ともに朱書き）がある（写真4参照）。

写真4Aは「三社本地薬師阿弥陀観音也」、Bは「若シルベスル海人ダニアラバ、忘レ草ノ、逢ト云浦■ノアタリニモ尋行ナマシト、」（■は朱による抹消。濁点・振り仮名・句切点は墨）という書き入れである。

Aは、具体的な対応を示していないが、本宮・新宮・那智の熊野三山（三所権現）の本地についての注である。[15] この注記が、『冥応集』巻第三8話においては、説話本文の中に取り込まれた形になっている。説話末尾で夢から覚めた僧が熊野へ帰り修行したことについて、『沙石集』が「和光ノ御方便ニテコソ有ケメ」とするのに対して、『冥応集』では「実ニ三所ハ本地弥陀薬師観音ナレバ、彼ヲ度セントテ此夢ヲ見セ玉フナルベシ」と、より具体的な記述になるのである。傍線部が、Aと重なることがわかる。

Bは写真4を見れば明らかなように、高滝へ帰ってしまった娘に対して僧侶が思いを募らせる部分の上に記されている。これも『冥応集』では、本文中に見える。『冥応集』での当該部分は、以下のようになっている。

何事ヲモ覚ヘザリケレバ、若シルベスル海人ダニアラバ、忘レ草ノ逢ト云浦ノアタリニモ、尋行ナマシト、負打掛テアクガレ出デ、上総ノ国ヘゾ下リケル。

傍線部の前後は『沙石集』（写真4の9～10行目）のままである。『沙石集』の「忍カタクシテ、心ノヤルカタト」（写真4の10行目）が、『冥応集』では傍線部に差し替わっているわけである。

当該説話を『冥応集』の中に収録した後で、『冥応集』の

B　　A

（写真４）巻第一９話

増補部分をわざわざ出典の『沙石集』に書き込むことは、皆無ではないにしても、不自然であろう。『冥応集』の前段階として、書き入れを持った『沙石集』があると考える方が無理がない。すなわち、『冥応集』編纂に直接利用されたのは、まさにこの地蔵寺本といえるのである。地蔵寺本は、『沙石集』と『冥応集』とを繋ぐ、いわゆる「失われた環（ミッシング・リンク）」的な位置付けが可能ではないだろうか。

Bに関しては、『冥応集』との繋がりから今一つ注目したい点がある。Bと同文である『冥応集』の前掲傍線部が、『太平記』巻第二十「義貞首懸二獄門一事付勾当内侍事」における、「若シルベスル海人ダニアラバ、忘レ草ノヲフト云浦ノアタリニモ、尋ネユキナマシト」を出典としていることは、すでに前稿で指摘した。

『太平記』の傍線部は、例えば岩波古典文学大系では、「忘れ草が生（お）う」と解釈されている。「忘れ草」という言葉は、『古今和歌集』に、

道知らば摘みにもゆかむすみのえの岸に生ふてふ恋忘れ草（巻第十四・墨滅歌　貫之）

とあるように、「生ふ」とともに使われることが多い。「ヲフ」に、「生」を当てるのは妥当なことであろう。また、「忘れ草」は、「憂い」、「恋のつらさ」などを忘れさせてくれる草として用いられることが多い。だからこそ『太平記』では、「忘れ草」の「生ふ」所へ行きたい、ということになるのである。

それに対し、Bや『冥応集』では、「忘レ草ノ逢」となっている。「生ふ」に比べると、意味を解し難い。また、「逢」という形も現時点では他の作品に見出せない。ところが、『冥応集』巻第四24話「備後尾道浦浄土寺ノ観音ノ事」には、

又玉章ノ数重ル程ニ、終ニハ人目ヲ忘草ノ、逢フト云、浦ニ行ヌ。

という類似の表現がある。この例は、「他人の目があることを忘れて逢う」と解釈できよう。あるいは蓮体は、Bや『冥応集』巻第三8話においても、「人目を忘れて逢う」という意味で「忘レ草ノ逢」を用いているのかもしれない。

ただし、たとえそうであったとしても、言葉足らずの感は否めないし、何に基づいて「（人目ヲ）忘レ草ノ逢」としたのかも未詳である。今後の課題としたい。ここで指摘しておきたいのは、少なくとも『沙石集』への書き入れを行った時点で、蓮体は「生ふ」ではなく、「逢ふ」で解釈していたということである。そして、それが『冥応集』にも引き継がれているということである。

五　おわりに

以上、蓮体所持本であった地蔵寺本『沙石集』を紹介し、その特色と『冥応集』との関係を考察した。地蔵寺本は、蓮体の『沙石集』に対する研鑽の跡を明確に示している。同時

に、既存の説話集から新たな説話集が生まれる過程もかいま見せてくれる。この二点において、地蔵寺本が貴重な資料であることは疑いないだろう。最初にも記したように、地蔵寺には蓮体が所持し利用したと目される説話集が『沙石集』以外にも所蔵されている。これらの調査は現在も継続中である。今後も調査・報告を積み重ね、蓮体の説話集編纂の過程を明らかにしていきたい。

注

(1)蓮体編『浄厳大和尚行状記』(元禄十五年〔1702〕成立)延宝二年(1674)正月二十九日条によれば、蓮体は同日に出家し諱を「妙厳」とするが、「後ニ」師・浄厳の諱を避けて「惟宝蓮体」に改めたという。この「後ニ」というのがいつの時点を指すのかは不明である。延宝二年以降「惟宝」を使った確実な例としては、信多純一氏蔵『普賢　息災』識語の、「元禄四年(1691)六月十一日一校了　惟宝〈廿九〉」(朱書)がある。これ以前から使用されていた可能性は高いと推定されるが、今後の調査で確認していきたい。

(2)広本系(十二帖本)は古本系(第一類本)、広本系(十帖本)は古本系(第二類本)、略本系は流布本系(第三類本・第四類本)とも分類される。なお、元応本・慶安五年刊本・天和三年刊本は平仮名本である。

(3)安田孝子氏「後世における『沙石集』受容」(『説話文学の研究　撰集抄・唐物語・沙石集』平成9　和泉書院)に紹介されている。なお、稲垣泰一氏「〈資料紹介〉架蔵貞享二年版『沙石集』について」では、貞享二年刊本が椙山女学園大学文学部日本語日本文学科共同研究室にも所蔵されていることが報告されている。

(4)注3稲垣氏論考に、当該部分の写真が掲載されている。

(5)以下、引用に際しては、字体は通行のものに改め、振り仮名は適宜省略した。

(6)蓮体の筆跡は、次の論考に写真が掲載されている。中山一麿氏「三宝院流偽経生成の一端—随心院蔵『即身成仏経』とその周辺—附・随心院蔵『録外秘密経軌目録』」(二〇〇四年度大阪大学大学院文学研究科共同研究報告書『小野随心院所蔵の密教文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその探求』平成17・3)、中川真弓氏「『観音冥応集』と宝泉寺縁起—蓮体の備中における書写活動をめぐって—」(『詞林』41　平成19・4)。

(7)謡曲『蟻通』・『龍田』などにも見える。岩波日本古典文学大系『謡曲集』を始めとする諸注釈書の注参照。

(8)中世の文学『雑談集』(昭和55　三弥井書店)の当該部分頭注など参照。

(9)地蔵寺には、寛永二十一年(1644)刊整版本『雑談集』も所蔵されている。

(10)俊海本は当該巻が欠けている。

(11)蓮体と同時代の作品である卍元師蛮編『本朝高僧伝』(元禄十五年〔1702〕自序、宝永四年〔1707〕跋)巻第十三にも「釈覚海、字南証」とある。

(12)地蔵寺本では「万葉ガ、リノ歌ノ事」の題目は、前の話題が終わった後、改行されずに記されている(正保四年刊本などでも同じ)。

(13)米沢本では「トウツイ」、元応本では「とうつい」、内閣文庫本

では「ふちおいイ」（朱）、慶安五年刊本では「ふぢおい」、天和三年刊本では「ふぢおい」の振り仮名や異本注記がある。

(14)上野陽子氏「阿岸本『砂石集』翻刻　巻四・巻五」（『三田国文』平成14・6）では、「藤追」と翻刻。

(15)熊野三山の本地を記す書は古くから数多くあるが、ここでは蓮体がおそらく披見した『西国洛陽三十三所観音霊験記』（松誉貞享四年［1687］刊）の「那智山如意輪堂」の項における、

またほんぐうこんげんは、ほんぢあみた如来しんぐうごんげんは、ほんぢやくし如来、那智山ひりうごんげんは、ほんぢ千手くはんおんぼさつ也。

を挙げておく（同書は、『冥応集』巻一の「援引書目」に「観音霊験記」として挙がっているものと推定される）。『冥応集』巻第三7話「那智ノ観音ノ縁起並ニ如意輪ノ真言功能ノ事」にも、

本宮証誠殿ハ、本地阿弥陀如来。両所権現ハ、薬師、観音ナリ。若一王子ハ、如意輪観音ナリ。号シテ日本第一大霊験、熊野三所権現ト云。那智山飛滝大権現ハ、本地千手観音ナリトイヘリ。

という記述がある。

［付記］貴重な蔵書の調査・掲載・引用を御許可していただいた地蔵寺御住職堀智真師、信多純一先生、京都府宮津市立前尾記念文庫、資料閲覧にあたり御高配を賜った諸機関に心よりお礼申し上げます。なお、『沙石集』の写本類は、前稿に引き続き写真版で確認したものが多い。その閲覧に関しては、荒木浩氏に御高配を賜った。また、慶安五年刊本『沙石集』の本文確認に関しては、中川真弓氏に多大な御協力を賜った。ここに深く感謝申し上げます。

（やまざき・じゅん　大阪工業大学非常勤講師）